



18

『食』がつなげる地域の輪

中津山第二小学校

今回は、中津山第二小学校を紹介します。

中津山第二小学校は、桃生総合支所、桃生公民館、銀行、病院などがある桃生地区の中心部に位置しています。

明治6(1873)年5月に中津山公立小学校として開校し、昭和61(1986)年に現在の場所に移転新築されました。

中津山第二小学校では、昨年度、文部科学省から、「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」の委嘱を受けたことを受け、今年度も食育に取り組んでいます。

学校では、栄養教諭が直接指導する給食の日(給食指導)を通して、楽しく食べること、そして自分たちが食べている給食には、どのような材料が使われているのか、その食材がどのような栄養を持っているのかなど、普段何気なく食べている物、好きな食



▲1年生給食の日



▲3年生おにぎり大会

物、嫌いな食べ物に関心や興味を持ってもらうことからスタートしました。

また、栄養教諭が、学級担任とペアを組んで食育に関する授業を行ったり、様々な取り組みの中で、家庭や地域の皆さんに協力してもらいながら、野菜作りや米作り、大豆作りなどを体験しました。

自分たちが栽培して、収穫した食材を調理して食す、地産地消を実践した「親子料理教室」では、食材や食事に対する関心がより一層高まりました。

「食育」により、児童はもとより、保護者・教師も健康と食生活の重要性を再認識したようです。

「食からつながってきた小さな輪をもっと大きな輪にするために、今後も家庭および地域との連携を密にして、継続的な取り組みを行っていきます。

にぎやか家族 26

三輪田



左から、和剛くん、康佑くん、智浩くん

《将来の夢》
 梶原 康佑くん (12歳) 野球選手
 和剛くん (10歳) 消防士
 智浩くん (8歳) 医師

お母さんから

兄弟げんかは、よくしていますねー。でも、3人とも明るく、元気いっぱいです。優しい気持ちを忘れないで、夢に向かって頑張ってください。

今月の表紙から

今月は、寄磯地区のアフビを紹介합니다。

アフビは、日本では、縄文時代以前から食用とされ、また、大変に縁起のいいものとされています。

特に、細く切ったアフビを乾燥させた熨斗鮑(のしあわび)は、図案化されて現在は熨斗紙として贈答の際に使われています。

日本では刺身や寿司などの生食が主ですが、中華料理では、日本産の干しアフビは高級食材として珍重されています。

今回は、アフビ漁解禁の日に寄磯



わたなべ ゆきとし 渡辺 幸敏 さん

漁港での水揚げの様子取材しました。この日、渡辺さんは、家族3人で60%ほどのアフビを獲りました。寄磯地区のアフビは、完全天然もので、テンプサを食べ育て育つので三陸地方のなかでも味がよく、生食用としてとても人気があるそうです。

サークル仲間

なかま ②6

子ども達のキラキラした瞳が“宝物”

そよかぜのおはなし

今回は、万石浦小学校で絵本などの読み聞かせを行っているボランティアサークル「そよかぜのおはなし」を紹介します。

長寿のひけつ



②2

野菜作りと温泉が好きです

河南地区須江 亀山みよのさん 91歳

今回は、野菜作りと温泉が好きで亀山みよのさんをご紹介します。

「そよかぜの優しい風のよみ」に自分達の声が子ども達の耳に届けば・・・そんな願いを込めながら、平成11年に活動がスタートしました。16人のメンバーが交代で、毎週火曜日の始業前（15分間）に、絵本のほか、紙芝居、素話（すわなし）などを見ずに、おはなしを語り聞かせる（こ）などを聞かせているほか、図書室の本の整理や背表紙の貼り替え、広報紙などをまよひまな、ジャンルの本の紹介もしています。



火曜日が来るのを楽しみにしています。

また、街中で出会ったときも、読んだ本に出てくる印象深い言葉などをいっしょに「あー○○○○」

リーダーの阿部由美さんは、自分のお子さんが幼児期のころ絵本の読み聞かせをしていたうえで、「学校でもやってみては？」との思いがきっかけとなり、会の発足につながりました。当時としては珍しい試み

のおばちゃん！と気軽に声を掛けてくれたりするので、活動を通してお互いの絆が深まっているのを感じています。「話しを聞いている子ども達の目の輝きは私達の宝物で、それを見るのが何より楽しい」とリーダーの阿部さんは言います。

で、多少不安もありました

3年ほど前から、子ども達から手紙をもらうようになったり、昨年は、小学生当時、おはなしを聞いていた高校生が一年間メンバーに加わり、後輩達にたくさんのおはなしを読んでもらってくれました。

が、学校側の協力もあり、今では子ども達も

皆さんのそよかぜの声は、じつじつと子ども達の耳に届いてくるといわれています。

須江にお住まいの亀山みよのさんは、大正5（1916）年に5人兄妹の末っ子として矢本に生まれ、昭和11（1936）年に結婚し、6人の子どもに恵まれました。

柿や栗の木があり、各地の農業祭へ行くのが楽しみで、昨年は無花果（むぎくわ）の苗を買ってきて植えました。「とれた野菜や果物を、孫に食べてもらい、喜んでもらうことが楽しみのひとつです」と話していました。

8年前に夫の希一さんを亡くし、現在は息子さんと二人暮らしです。「腰は曲がっていますが、痛みはないし持病もなく健康です」と笑顔で話していました。

また、温泉も好きで、一昨年は京都の天橋立へ旅行に行き、ケーブルカーにも乗ってきました。

毎朝、畑に出かけサヤエンドウ、ササギ、大根などの野菜作りをしています。ほかに、庭

みよのさんのこの行動力と多くの友人に恵まれたことが、健康と若さの源のようです。

